

災害を契機とした語り直しの場に関する研究

熊本大学大学院自然科学教育部 学生会員 ○高良幸作 熊本大学 正会員 田中尚人

1. はじめに

今日、「風化」という言葉は、「熊本地震の風化」、「東日本大震災の風化」、「原子力発電所事故の風化」のように、負の出来事に対しての記憶が月日とともに薄れていくという「忘却」の意味で使われている。時間とともに、災害の記憶だけでなく、日常的な出来事も風化することも考えられる。記憶を繋いでいくために、アーカイブとして収集し、保存、活用することが必要とされている。さらに、社会的逆境後の精神的な回復や成長を支える重要な要因として、自己の過去の経験を語ることが注目されおり、出来事を語り継いでいくためには、自己の経験だけでなく、他者の経験も語ることが必要だと言える。

既往研究として、記憶の継承の場に関する研究や語り直しに関する研究、ジレンマに関する研究を整理した。本研究の新規性として、熊本地震から5年を契機として被災経験の有無に関わらず語り直しの特徴や場の構造を分析した研究は少ない。目的として、災害を契機とした語り直しの場の構造を明らかにする。

2. 語り直しの場の定義

本章では、文献調査をもとに語り直しと語り直しの場の定義を行う。

(1) 語りの効果

やまだ¹⁾によると、ライフストーリー研究において、語りを繰り返すことで、絶えずつくられ、組み替えられるライブ(生きた)生成プロセスを筋立てる行為だと言われている。

(2) 災害をきっかけとした語り直しの効果

矢守²⁾によると、災害をきっかけとした語りを繰り返すことは、語り手の新しいエピソードの発見や変化が生まれると考えている。

(3) 語り直しの場の定義

本研究において、語り直しとは、何かをきっかけとして自分の過去の経験や他者の言葉を思い出し、考え、言語化する行為と定義する。さらに、語り直しの場とは、時間、空間、人間の3つの間によって構成される場と定義する。



図-1 語り直し

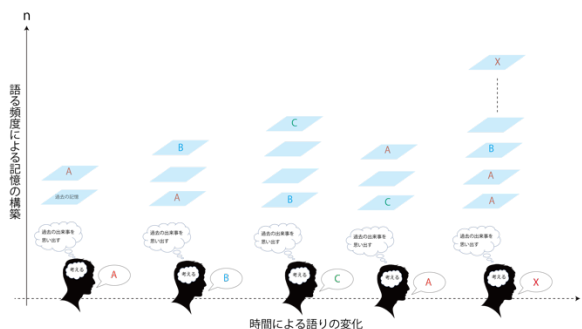


図-2 語り直しの場

3. 熊本地震における語り直しの場の役割

本章では、熊本地震の実態とインタビュー調査をもとに、語り直しの場の役割を考察した。

(1) 平成28年熊本地震

熊本地震³⁾は、2016年4月14日に熊本県益城町で震度7、4月16日に熊本県益城町と西原村で震度7を観測した。この短期間における2度の震度7を超える地震を前者は前震、後者は本震と言う。

(2) 熊本地震後5年目の実態

熊本地震から5年となる前に熊本日々新聞が行ったアンケート結果⁴⁾によると、地震の記憶が風化していると感じている人の割合が全体の6割を超えた一方で、被害が大きかった益城町や南阿蘇村などでは5割未満に留まり、県内でも地震に対する記憶の差が生じている。

(3) 熊本地震を契機とした語り直しの場の役割

本調査では、熊本地震の語り継ぎを行っている6名にインタビュー調査を行った(表-1)。語り直しの特徴として、自らの過去の経験以外にも、他者の経験談を話すなどの特徴が見られた。語り直しの場の特徴としては、時間、空間、人間の3つの間に対して、語りの内容の変化も見られた。役割として、熊本地震を契機とした日常を見直す場として考察できた。

表-1 インタビュー者の属性

	性別	年齢	所属	日時	被災経験	インタビュー方法
A	女性	20代	阿蘇の灯 元代表	2021/11/15	無し	zoom
B	男性	30代	南阿蘇村役場 地域おこし協力隊	2021/11/19	無し	対面
C	女性	60代	震災ミュージアム 語り部	2021/11/21	有り	対面
D	男性	50代	会社経営 旅館業	2021/11/26	有り	対面
E	男性	30代	農家	2021/12/20	有り	対面
F	女性	70代	益城町語り部の会 代表	2021/12/21	有り	対面

4. クロスロードゲームを用いた語り直しの場の分析

本章では、クロスロードゲーム（以下、CR と明記）を用いて、災害をきっかけとした語り直しの場の分析を行った。

(1) WS デザインの意図・趣旨

研究手法を「①CR 作問ワークショップ（以下、WS と明記）、②事前事後アンケート」とした。CR 作問 WS では、被災経験の有無に関わらず、震災時の体験や経験を自分なりに考えて書くことができるため語り直しの場となると考えた。また、作問 WS を行う前に事前アンケートを行い、作問後、事後アンケートを行った。アンケート結果より、語り直しの場における変化や構造の分析を行った。

(2) CR 作問ワークショップの概要と結果

12 月 4 日に第 1 回目の CR 作問 WS を行った。参加者は被災経験のある者 4 名と被災経験のない者 2 名の計 6 名で行った（表-2）。まずは、事前アンケートの記入、CR の作問を行い、事後アンケートを記入してもらった。事前アンケートでは、記憶に残る災害についての問いに関して理由を添えて記入してもらった（表-3）。参加者の年代を踏まえると、近年起こった災害だけでなく、人災も含めての結果を得ることができた。さらに、熊本地震のことを語る頻度についての質問に関しては、6 人中 4 人が「月 1 回程度」と答え、残り 2 人は「半年に 1 回程度」と答えていた。事後アンケートに関しては、災害を語る場に参加して、学んだことや大事だと感じたことについての質問に関して答えてもらった（表-4）。

表-2 CR 作問ワークショップ参加者

人数	ご所属	性別	年齢	出身地	被災経験
A	熊本市役所	男性	50代	熊本県甲佐町	あり
B	有明広域消防本部	男性	40代	熊本県長洲町	あり
C	自治会関係（防災担当）	男性	50代	広島→三重→東京→熊本	あり
D	熊本大学	女性	20代	熊本県熊本市	あり
E	学生	男性	20代	長崎県	なし
F	熊本大学	男性	50代	京都府	なし

表-3 災害の認識

回答者	あなたが記憶に残る災害と、その理由を教えてください
A	阪神大震災、被災地に災害ボランティアとして参加したため。
B	9.11米国同時多発テロ事件、自然災害も日本各地で考えられるけれど人災の恐ろしさを目にした消防学校での出来事はインパクト大だった。
C	熊本にきた年（91年）に起きた雲仙の大火災流と台風19号 初めて「火山灰」の体験と初めて風速50m、一人暮らしになったこともあり「一人で立ち向かう災害」として印象深い
D	特になし、直接体験がないためか、各地で激甚な災害が起きたとしても大変そうという印象と、どうすべきかとは思っている。
E	R2球磨川豪雨 実際に訪れたことのある場所だったためスケール感が想像しやすかったから
F	熊本地震 人生が変わったから

表-4 語り直しの場に参加しての学び

回答者	災害のことを語る（話す）場に参加して、学んだことや大事だと感じたことはありますか？
A	若い方々の自らが考えていなかった考えを聞けたよかったです。 年代により、観点が異なる。
B	被災経験を吐き出すことも大切だし、語り継ぐことは誰しもが引き継ぐ世の中になれば防災が進むと思う。
C	とてもいいと思います。「共通体験」を持つ人との対話で心安らぐこともあり、また、「知らない人」に話すことで、自分の中身が整理されたり、「人と話す」のはとても大事。
D	色んな経験を聞いてみることで、違う立場を想像して見ること
E	視野を広く持ち、自分以外の立場の人の声も聞くことが大事。自分以外の立場の人の考えを予想することの難しさを感じたから。
F	言葉にすること、他者と一緒に自分を見つめること。

5. おわりに

本研究では、インタビュー調査のもと、語り直しの場における役割を仮説的に検証することができた。その後、CR 作問 WS を通して、被災経験の有無に関わらず、熊本地震のことを語り直す場になりうるものが考察できた。今後の展望として、作問時に抽出した語り直しの分類を分析する。さらに、今回の対象者に踏まえて、さらにサンプル数を増やして事前事後アンケートにより、対象者の属性ごとに、災害の認識を比較分析を行います。結論として、抽出した作問内容に対して、時間、空間、人間の 3 つ問より作問内容に対して KJ 法を用いて分析し構造化し、語り直しの場の構造を明らかにする。

参考文献

- 1) やまだようこ：人生を物語ることの意味—なぜライフストーリー研究か？日本教育心理学会，教育心理学年報, 39,2000-03-30
- 2) 日本災害復興学会，第 4 回研究会復興とは何かを考える委員会，議事録（全文）2009 年 8 月 8 日
- 3) 気象庁：（2020 月 12 月 20 日引用）
https://www.jma.go.jp/jma/menu/h28_kumamoto_jishin_menu.html
- 4) 熊本日日新聞，2021 年 04 月 06 日，記事